

ホッブズの形而上学

— 彼の自然学のまえに置かれ、あとに完成される学問 —

秋 元 ひろと

Hobbes's Metaphysics: A Science Placed before and Completed after his Physics

Hiroto AKIMOTO

Abstract

Hobbes, in his metaphysical inquiry set out in Part 2 of *De Corpore*, reduces the basic concepts of the Aristotelian metaphysics, such as substance, essence, and accident, to the concepts of body and accident, in particular the two accidents of extension and motion. The point of his reduction consists of materialism, nominalism, and mechanism.

(i) Materialism: regarding body as the only substance, he reduces substance to body.

(ii) Nominalism: regarding the distinction between essence and accident as relative to denomination, he reduces essence to accident.

(iii) Mechanism: he reduces accidents to extension, the accident which characterizes body in general, and motion, the accident which explains change in bodies.

This reduction, and hence his metaphysics, provides a conceptual framework for his physics. In this sense, his physics depends on his metaphysics. However, the dependence relation between metaphysics and physics is not unilateral but bilateral. For the reduction, and hence his metaphysics, is estimated to be successful only to the extent that his physics is able to explain the phenomena of nature by using the conceptual framework provided by his metaphysics. Therefore, Hobbes's metaphysics is characterized as a science placed before and completed after his physics.

はじめに

ホッブズの『物体論』第2部は「第一哲学」と題されている。「第一哲学 *philosophia prima*」は、いうまでもなくアリストテレスの『形而上学』に由来する用語であり、スコラ学においては「形而上学 *metaphysica*」の同義語としても用いられた表現である。ホッブズは『物体論』第1部「論理学」の認識論に続けて、第2部では形而上学を彼なりの仕方で開催しているのである。^[1]

研究史を振り返ってみると、形而上学をはじめとするホッブズの理論哲学に関する研究は、政治学を中心とする彼の実践哲学に関するそれと比べて相当に手薄であるといわざるを得ない。こうした動向のなかでレイエンホルストの『アリストテレス主義の機械論化—トマス・ホッブズの自然哲学の後期アリストテレス主義的背景—』(2002)は、ホッブズの形而上学に関係する事柄を扱った研究として貴重である。しかし、同書の副題が示すように、レイエンホルストの主たる関心はホッブズの自然哲学ないし自然学にある。^[2] 実際レイエンホルストは、ホッブズの「第一哲学」について「その表題がアリストテレスの形而上学の伝統的ラベルの一つであることは事実だが、その内容は形而上学的ではない。ホッブズが行うのは、むしろ自然学の基本概念の解明である」(Leijenhorst 2002, 5)と述べている。しかし、

空間と時間、物体と偶有性、原因と結果、可能性と現実性などの概念をめぐって展開される『物体論』第2部の議論は形而上学である（あるいは少なくともそれを含む）というよいように思う。

ホッブズは、物体の運動と静止に関して慣性法則に相当することを主張するなど、たしかに形而上学というよりはむしろ自然学に属する事柄も扱っている。^[3] また自然学の基本概念の解明を、それは自然学にかかわるのだから形而上学ではないと見るか、概念枠組みにかかわるのだから形而上学であると見るかは「言葉の争い」であるともいえる。しかし、ホッブズの第一哲学は基本的には自然学の事柄を扱っていると見なしたことによってレイエンホルストが不明瞭にしているのは、自然現象を説明する概念枠組みにかかわる考察と、それらの概念を用いて自然現象を説明することとの関係、私の言葉づかいでは、形而上学と自然学との関係を問うという視点である。

そして、この関係こそが本稿の主題である。第1節から第4節ではホッブズの形而上学について、第5節では彼の自然学について考察する。そして最後に第6節では両者の関係を論じて、ホッブズの形而上学が、彼の自然学のまえに置かれ、自然学にその概念枠組みを提供するという役割を果たす一方で、そうした枠組みでもって展開される自然学の成果をまっぴらしてはじめて、つまり自然学のあとに完成されるという性格の学問であることを明らかにしたい。

1. 第一哲学と形而上学

第一哲学を、ホッブズ自身は、すべての哲学の基礎学としてつぎのように規定している。

「第一哲学」といわれるものがあって、それは、その他すべての哲学がそれに依存すべきものである。それは、数々の呼称ないし名辞のなかでも、もっとも普遍的であるようなものの意味を正しく限定することを主たる任務とする。この限定は、推論における曖昧さや多義性を避けるのに役立つ、ふつう定義と呼ばれる。物体、時間、場所、質料、形相、本質、主体、実体、偶有性、可能性、現実性、有限、無限、量、質、運動、能動、受動など、諸物体の本性および生成について人がもつ想念を説明するのに必要とされるその他さまざまな名辞の定義がそれである。」(Lev, 46.14.371)

これと、アリストテレス主義の第一哲学（存在者を存在者として *ens qua ens* 研究する学問、特定の個別の存在者ではなく、存在者一般を研究する学問）との関係についてはすぐあとで検討することにして、『物体論』第2部の第一哲学が、上の引用でホッブズが規定している意味でのそれであることを確認しておこう。それは、第2部を構成する各章の表題を見れば分かる。ここでは、本稿で取り上げて論じる諸章にかぎってそれらの表題をあげておく。

第7章 場所と時間について

第8章 物体と偶有性について

第9章 原因と結果について

第10章 可能性と現実性について

さて、これらの概念を主題とするホッブズの第一哲学は、アリストテレスの『形而上学』よりはむしろ『自然学』の内容にそくしたものであり、レイエンホルストによれば、それはスコラの「一般自然学 *physica generalis*」に相当するものであるという。一般自然学は、特殊自然学と対をなすもので、後者が「天体や動物などの個別の物体を論じる学問」であるのに対して、前者の一般自然学は「自然的物体

一般、それらの原理やそれらに共通の属性を論じる学問」(Leijenhorst 2002, 5)であった。そして多くの場合、それはアリストテレス『自然学』のとりわけ最初の四巻の注釈というかたちをとって著されたという。^[4] 実際、それらの巻でアリストテレスが論じるのは、質料、形相、原因、運動、無限、場所、空間等の諸概念であり、これらは、ホッブズが第一哲学の主題として列挙するものでもある。

それでは、なぜホッブズは一般自然学に相当する内容をもつ学問を第一哲学と呼んだのか。これに関連して注目すべきは、彼による第一哲学の規定が、スコラの形而上学に対する批判と一体をなしていることである。本節冒頭で引用した箇所が続いて、ホッブズはつぎのように述べる。

「これらの、またこれらに類似の用語の説明(換言すれば、意味の設定)は、大学ではふつう「形而上学」と呼ばれる。そうした説明は「形而上学」を表題にもつアリストテレスの哲学の一部だからである。しかし、それは[本来とは]別の意味でそう呼ばれている。というのも、そこ[アリストテレス哲学]において、それ[形而上学]が表すのは「彼の自然哲学のあとに書かれた、あるいは置かれた書物」ということだけだからである。ところが大学では、その書物を「超自然哲学の書物」と解している。「形而上学」という語は、それら両方の意味をもつからであろう。実際そこ[スコラ学者の形而上学]に書かれていることは、その大部分がまったく理解不可能であるし、あまりにも自然理性に反しているため、そこに何か理解すべきことがあると考える人はだれでも、それをどうしても超自然的なことと考えざるを得ないほどなのである。」(Lev, 46.14.371)

スコラ学者たちは、形而上学を、自然を超えた事物、自然理性によって捉えられる範囲を超えた事物を主題とする学問、すなわち超自然学であると解している。^[5] しかし、これは誤解であって、第一哲学としての形而上学は、本来、物体一般の理解にかかわる普遍的な諸概念を定義して、全哲学の基礎を提供すべきもの(その他すべての哲学がそれに依存すべきもの)なのだという。これは、一般自然学を、それがそうした諸概念を論じる学問であるかぎり、第一哲学と見なすことであり、一般自然学と第一哲学としての形而上学とを同一視することである。

この同一視の背景にあるのは、ホッブズの唯物論的な存在観である。第一哲学としての形而上学は、特定の個別の存在者ではなく、存在者一般を研究する学問であるのに対して、一般自然学は、特定の個別の物体ではなく、物体一般を研究する学問である。しかし、ホッブズが独立自存する存在者(実体)として認めるのは物体のみである。それゆえ存在者一般を研究することと、物体一般を研究することとの違いは失われ、形而上学ないし第一哲学と一般自然学とは同一視される。こうしてホッブズは、存在者一般を研究する学問という、スコラの形而上学ないし第一哲学の規定を受け継ぎつつも、存在者を物体と読み替えることによって、一般自然学こそが第一哲学であり形而上学であるという独自の立場を打ち出しているのである。

そしてホッブズの第一哲学に関して重要なもう一つの点は、それが唯名論の伝統に根ざしていることである。第一哲学の仕事は、実体、本質、偶有性などの普遍的な諸概念を定義することである。しかし、ホッブズによれば「この世界に、名辞のほかには普遍的なものはない」(Lev, 4.6.13)なのであるし、彼の意味論によれば「名辞は事物の記号ではなく、思考の記号である」(DCo, 2.5, title)。それゆえ、それらの概念を定義する第一哲学も、存在者すなわち物体それ自体にかかわるといよりは、むしろわれわれ人間が物体についてもつ思考ないし想念、つまりわれわれ人間が物体を理解する仕方にかかわることになる。第一哲学の仕事は「諸物体の本性および生成について人がもつ想念を説明するのに必要とされる……さまざまな名辞の定義」(Lev, 46.14.371)を与えることにあるというわけである。

ホッブズの第一哲学ないし形而上学の、唯物論、唯名論とならぶもう一つの基本的特徴に機械論があ

るが、これについては第3節の(2)で触れる。

2. 空間と時間

第7章は「場所と時間について」と題され、ホップズの第一哲学は「空間 *spatium*」と「時間 *tempus*」を論じることから始まる。^[6] それらの概念を導入するに際して彼が依拠するのが「宇宙の除去 *universi sublatio*」の仮定である。^[7]

世界が、つまりそれを構成するすべての物体が、ただ一人の人間だけは例外として、除去されたと仮定せよ、とホップズはいう。このとき「その人間には、世界と全物体の観念が、すなわち、それらが除去される以前に、彼が目にした、その他の感官で知覚したりしたものの観念が残るであろう」(DCo, 7.1)。そこで「外的諸事物の仮定上の除去以前に存在していた事物を、いまわれわれが想起した、つまりその事物の表象をもったとして、しかもそのとき、その事物がどのようなものであったかは考慮に入れようとせず、ただそれが心の外部にあったということだけを考慮に入れるなら、われわれは「空間」と呼ばれるものをもつ。これは、私の表象 *phantasma* であるのだから想像上の *imaginarium* 空間であるが、すべての人々が空間と呼ぶ当のものである」(DCo, 7.2)。

かくして空間は、つぎのように定義される。

「空間とは、現実存在する事物の、ただしそれが現実存在であるかぎりでの表象」、換言すれば、その事物がその心像をもつ者の外部に現れているということだけは別にして、その事物がもつ他のいかなる偶有性も考慮に入れない場合の表象である。」(DCo, 7.2)^[8]

偶有性という言葉が出てきた。そこで、少し先回りをして第8章で定義される偶有性を見ておくことにする。「偶有性 *accidens*」は、「物体 *corpus*」とならぶホップズの形而上学の基本概念であり「物体が想念される仕方 *conciendi corporis modum*」(DCo, 8.2)と定義される。たとえば、われわれがある物体を移動しているものと想念すれば、移動はその物体の偶有性であるし、静止しているものと想念すれば、静止はその物体の偶有性である。

空間に話を戻せば、われわれは、物体を「どこか」に、つまり「われわれの外部」にあるものとして(しかも、ただそれだけのものとして)想念する。このときわれわれがもつのが「空間」の表象である。それは「われわれが物体を想念する仕方」の一つであるから物体がもつ偶有性の一つである。さらに、われわれは、物体を「空間内のどこか」にあるものとして想念するであろう。このときわれわれがもつのが「場所 *locus*」の表象である。

「どの物体であれ、その大きさと一致する空間(この語によって私が理解するのは、つねに想像上の空間である)を、その物体の「場所」という。」(DCo, 8.5)^[9]

場所は、空間の部分、ある特定の物体が占めていると想念される部分と考えれば分かりやすいだろう。これは、やはり物体が想念される仕方の一つであるから、物体がもつ偶有性の一つである。空間は、物体一般が想念される仕方であり、その意味で物体一般の偶有性であるのに対して、場所は、ある特定の物体が想念される仕方であり、その意味で特定の物体の偶有性であるということが出来る。

ところで、ホップズは「物体が想念される仕方」という偶有性の定義に加えて、「物体の能力であって、それによって物体の想念がわれわれに刻印されるところのもの *facultatem corporis, qua sui*

conceptum nobis imprimit」(DCo, 8.2) という定義にも言及している。前者は、偶有性をわれわれが物体についてもつ「想念」のレベルにおいて規定するものであり、その意味で現象論的定義である。それに対して後者は、偶有性をわれわれがもつ想念を生み出す「物体」のレベルにおいて規定するものであり、その意味で実在論的定義である。このようにホッブズの形而上学は「われわれが物体を想念する仕方」にかかわる現象のレベルを基本とするが、その背後には「物体そのもの」にかかわる実在のレベルが控えている。^[10]

したがって、たんに空間といえば「想像空間 *spatium imaginarium*」のことであるというが、ホッブズは「一部の人々が「実在空間 *spatium reale*」と呼ぶもの」(DCo, 8.4) についても語る。^[11] ホッブズが物体の「延長 *extensio*」ないし「大きさ *magnitudo*」と呼ぶものがそれであって、それは「想像空間とは違って、われわれの思考には依存しない。……想像空間は心の偶有性であるが、実在空間は心の外部に現実存在するものの偶有性である」(Ibid.) というのである。^[12]

最後に、時間についてごく簡単に触れておこう。これもわれわれが物体を想念する仕方の一つであり、物体がもつ偶有性の一つである。それは、われわれが物体を運動するものとして、換言すれば、はじめはここに、つぎにはあそこに現実存在するものとして想念するときにもつ表象であって、つぎのように定義される。

「時間とは、われわれが運動に、より先とより後、すなわち継起を想像するかぎりでの運動の表象である。」(DCo, 7,3)

ちなみに「運動 *motus*」は、第8章において「ある場所の放棄と、別の場所の獲得が連続すること」(DCo, 8.10) と定義される。

3. 物体と偶有性

(1) ホッブズの剃刀

空間は、われわれが物体を想念する仕方として導入されたが、第7章の「宇宙の除去」の仮定のもとでは、物体の実在はいったんカッコに入れられていた。第8章ではその仮定が解除され、カッコのいわば埋戻しが行われる。「この〔再〕創造されたもの、あるいは置き戻されたものは、上述の空間のどこかある部分を占める、つまりその部分と一致し、その部分と延長を共にするだけでなく、われわれの想像に依存しない何ものかである」(DCo, 8.1) という。

かくして物体は、空間（あるいは場所）の概念と相関的に、つぎのように定義される。

「物体とは、何であれわれわれの思考に依存しないものであり、空間のどこかある部分と一致する、あるいはその部分と延長を共にするものである。」(DCo, 8.1)

それは「延長を有するため「物体」とふつう呼ばれるが、われわれの思考と独立であるため「自立存在 *subsistens per se*」と呼ばれ、われわれの外部に存在するがゆえに「現実存在 *exsistens*」と呼ばれる。最後に、想像空間の下に敷かれ、置かれているように見え、そこに何かがあるということが、感覚ではなく理性〔推論〕によってのみ理解されるので「仮定物 *suppositum*」や「主体 *subjectum*」とも呼ばれる」(DCo, 8.1)。

物体を延長によって特徴づけるデカルト的な見解を別にすれば、ここに列挙されているのはアリストテレス主義の形而上学の諸概念である。^[13] しかし、それらはホッブズが世界を捉える仕方にそくして再解釈を施されたものであるし、それらは物体の別名にほかならないというのであるから、ホッブズの真意は、それらの概念なしで形而上学を構築すること、それらの概念をスコラの形而上学が生やしてきた無駄な髭として剃り落としてしまうことにある。

ホッブズの剃刀は、質料、形相や本質の概念も剃り落としてしまう。それがどのような試みであるかを確かめるため、ここでアリストテレス主義の形而上学の基本事項を、以下の論述に必要なかぎりで押さえておくことにしよう。^[14]

実体と偶有性の概念から見ていこう。実体とは、それをある種類の個体とする本質を備えた、独立自存する存在者である。それに対して偶有性とは実体を限定する存在者であり、偶有性はそれが限定する実体に内在ないし内属するという仕方では存在する。実体は、偶有性との関係では、偶有性がそれに内属するところの主体ないし基体としての役割を果たす。たとえば一個の赤いリングを考えれば、そのリングが実体であり、赤色がその実体を限定する偶有性である。

つぎに、質料と形相に欠如を加えた三つの概念を用いて与えられる変化の説明を見てみよう。変化とは、形相が質料のうちに可能性としてひそんでいた状態（可能態）から、形相があらわになり現実性に達した状態（現実態）への移行である。このとき「質料 *materia*」は、変化を被る何ものかとして、変化を通じて存続する主体である。そして形相の「欠如 *privatio*」（形相がいまだ可能性の状態にある質料）が変化の始点であり、「形相 *forma*」（形相が現実性に達した状態の質料）が変化の終点である。^[15]

実体と偶有性の区別は、変化の説明にも反映され、実体レベルでの変化（実体的変化）と偶有性レベルでの変化（偶有的変化）とが区別される。たとえば青かったリングが赤く色づくのは、リングという実体、したがってその本質はそのままその偶有性だけが変化する場合であり、偶有的変化と呼ばれる。変化一般の説明の三要素「質料」「欠如」「形相」との対応関係を示せば、いまの例において変化の主体、つまり質料に当たるのは実体としてのリングである。形相に当たるのは、リングという実体を限定して、それを赤く色づいたリングにする偶有性（「偶有的形相 *forma accidentalis*」といわれる）としての赤色であり、赤く色づいたリング（赤色という偶有的形相が現実性に達した状態のリング）が変化の終点である。そして欠如に当たるのは、赤色という偶有的形相の欠如であり、赤く色づく前の青いリング（赤色という偶有的形相がいまだ可能性の状態にあるリング）が変化の始点である。

アリストテレス主義者は、偶有的変化しか被らず、それ自体は生成することも破壊されることもない存在者（たとえば天体）もあると考えた。しかし、地上の存在者たとえばリングは、やがて朽ちるし、残された種が育って再び生まれることもある。つまり生成・破壊する。これはリングという実体、したがってその本質はそのままその偶有性だけが変化するという偶有性レベルでの変化とは異なり、リングであったものがリングではなくなり、リングではなかったものがリングになるというリングの本質にかかわる実体レベルでの変化であるから、実体的変化と呼ばれる。アリストテレス主義者は、このときも変化の主体となる質料があると考えて、それを「第一質料 *materia prima*」と呼んだ。リングではなかったものがリングになる場合を考えれば、形相に当たるのは、第一質料を限定してそれをリングという実体にするリングの本質（「実体的形相 *forma substantialis*」といわれる）であり、リングになった第一質料（リングの本質という実体的形相が現実性に達した状態の第一質料）が変化の終点である。そして、形相の欠如（リングの本質という実体的形相がいまだ可能性の状態にある第一質料）が変化の始点である。

ホッブズに話を戻して、本質、形相、質料の定義を見てみよう。

「偶有性でも、それがためにわれわれが物体にある一定の名前を付与するところの偶有性、あるいは、

その主体 [が如何なるものであるか] の命名となっているような偶有性は、ふつう「本質 *essentia*」と呼ばれる。理性的であることが人間の、白色が白いものの、延長が物体の本質であるといわれるのは、そのためである。同じ本質は、それが生成されたものであるかぎりでは「形相」といわれる。

一方、物体は、それが有する偶有性との関係では「主体」と呼ばれ、形相との関係では「質料」と名づけられる。」(DCo, 8.23)

物体を実体と読み替えれば、ここでホッブズが述べることは、アリストテレス主義者が述べることとかなりの程度一致するように見える。形相の定義は、変化の終点としての形相についての、質料の定義は、変化の主体としての実体(物体)についての発言として読むこともできるからである。しかし、アリストテレス主義と異なるのは、唯名論の立場から、本質を偶有性の特殊ケースとしてそれに還元していることである。ある種の偶有性は本質と呼ばれるが、それは「命名 *denominatio*」に相対的なことだというのである。実際ホッブズは、白色という通常は偶有性に数えられるものを本質の一例にあげている。これは、実体の本質(実体的形相)とその偶有性(偶有的形相)との区別、したがって実体レベルでの変化(実体的変化)と偶有性レベルでの変化(偶有的変化)との区別もまた命名に相対的なものであり、両者のあいだに絶対的な区別はないことを意味するはずである。

上の引用に続く箇所を見てみよう。

「どのような偶有性でも、その産出もしくは破壊は、偶有性の主体が「変化する」といわれるようにさせるが、ただ形相の産出もしくは破壊だけは、主体が「生成する *generari*」もしくは「破壊される *interire*」といわれるようにさせる。」(DCo, 8.23)^[16]

ホッブズは、たしかに、偶有性レベルでの変化と主体(実体)レベルでの変化との区別を問題にしている。しかし「……といわれるようにさせる ... *facit, ut ... dicatur*」という言い回しが示すように、彼が問題にしているのは、正確には「語り方」の区別である。実際、さきに引用した定義によれば、形相は本質の別名であり、本質は偶有性の一種なのであるから、形相の産出・破壊も、偶有性の産出・破壊であり、主体の「変化」と「生成・破壊」とのあいだに基本的には違いはないということになる。たとえば、あるものを「人間」と命名すれば、色白の人の肌の色が変わるのは主体の変化であるが、同じものを「白いもの」と命名すれば、それは主体の破壊なのである。

しかし、ある事態を主体の変化と見るか、生成・破壊と見るかは命名の仕方次第であり、命名に相対的なのだとしても、さまざまに命名される何ものか、つまり命名の主体ないし基体が命名に相対的なものとして存在しなければならない。物体がそれである。

「物体は、生成したり破壊されたりすることはあり得ず、たださまざまな相のもとで、つぎつぎと異なる仕方でわれわれに現れ、それに応じてつぎつぎと異なる仕方で名づけられるだけである。そのため、いま人間と呼ばれるものが、のちに人間でないものと呼ばれることはあっても、いま物体と呼ばれるものが、のちに物体でないものと呼ばれることがあってはならない。」(DCo, 8.20)

物体は、生成・破壊を免れた唯一の実体として、さまざまな偶有性の、したがってさまざまな仕方での命名の主体(命名される何ものか)としての役割を果たす。このように考えるホッブズにとっては、第一質料もまた物体の別名にほかならない。「第一質料」という語をわれわれが使うとき、それは「物体を、大きさないし延長 [という偶有性] と、形相ならびに諸偶有性を受け取る適性とだけは別にして、

それ以外のいかなる形相も、つまりいかなる偶有性も考察することなく、考察していること」(DCo, 8.24)を意味しているというのである。

こうしてホッブズは、物体と偶有性の概念だけを残して、アリストテレス主義の形而上学の基本概念をそれらに還元してしまう。第8章の表題「物体と偶有性について」は、彼の形而上学のこうした基本戦略を端的に表したものである。そして「物体は、生成したり破壊されたりすることはあり得ず、たださまざまな相のもとで、つぎつぎと異なる仕方であれわれに現れ、それに応じてつぎつぎと異なる仕方であれわれに現れるだけである」(DCo, 8.20)といわれるように、物体と偶有性を基本概念として形而上学を組み立てることは、アリストテレス主義が変化を捉える枠組みを放棄して、変化をたんに物体がもつ偶有性の入れ替わり（これは結局のところ、物体を命名する仕方の入れ替わりである）という観点からのみ捉えることを意味する。この点については、ホッブズの因果論について検討する第4節であらためて触れることにしよう。

(2) 延長と運動

偶有性のなかでも、ホッブズが特別視するものがある。延長と運動がそれである。

ホッブズは、偶有性が主体に内在する仕方を論じて、「偶有性は、主体に、あたかも[その]部分であるかのように内在するのではなく、主体が破壊されなくともなくなることがあり得るような仕方である」(DCo, 8.3)という発言をアリストテレスのものとして引く。^[17]そして、これを原則的には受け入れつつも、延長はその例外であるという。延長のない物体は考えられない、というのがその理由である。またホッブズによれば、物体は生成・破壊を免れた唯一の実体であるのだから、延長は生成・破壊を免れた偶有性であり、その意味でも特別の偶有性であるいえるだろう。

またホッブズは、偶有性を二種類（いわゆる第一性質と第二性質）に区別する人、すなわち「すべての偶有性が、それらの[主体である]物体に、延長、運動、静止あるいは形状が内在するような仕方であるのではなく、たとえば色、熱、匂い、徳、悪徳、等々は、[延長等とは]異なる仕方である」(DCo, 8.3)と考える人に対して、判断の保留を要請する。

「そのような人には、このことに関する判断をさしあたり保留して、後者[色など]の偶有性もまた運動でないかどうか、すなわち心像を形成する心の、もしくは感覚される物体それ自体の何らかの運動でないかどうか、これについて推論による探究が済むまで、しばらく待っていただきたい。というのも、その点の調査は自然哲学の主要な部分をなすのだからである。」(DCo, 8.3)

ホッブズが目論むのは、さまざまな偶有性を、实在のレベルでは物体がもつ延長と運動に還元することである。現象のレベルでは、われわれは、物体を色や熱などの偶有性をもつものとして想念する。しかし、物体すなわち实在のレベルでは、それらの偶有性は、感覚される物体の運動、もしくは感覚する心（ホッブズの唯物論的な存在観によれば、それは感覚器官や脳などの身体の一部である）の運動にはかならないと考えるわけである。ただし、そうした還元の成否は、現象レベルの事柄を物体とその運動によって説明する自然学の成否にかかっているというのである。

ちなみに、こうした機械論的な見方は、ホッブズが1630年代に取り組みを開始した光学研究を経て形成されたもので、たとえば1640年に完成した『法の原論』には、つぎのような発言がある。

「われわれの感官が、それらは世界のなかにあるとわれわれが考えるように仕向ける偶有性や性質は、どれも世界のなかにあるのではなく、外観 *seemings* や現れ *apparitions* であるに過ぎない。われわれ

の外部の世界のなかに実在する事物は、これらの外観を引き起こす運動である。これは感覚の重大な欺きであるが、その欺きもまた感覚によって訂正される。というのも、私が直接 [対象] 見るとき、色は対象のうちにあるように見えると感覚は私に教えるが、これと同様に、私が反射によって [対象] 見るとき、色は対象のうちにはないと感覚は私に教えるのだからである。」(EI, I.2.10)

さて、さまざまな偶有性が延長と運動に還元されるのであれば、延長は生成・破壊しないのであるから、物体がもつ偶有性の生成・破壊としての変化は、物体の運動に存することになる。また延長の量的増減も変化の一種であるが、それは物体からその一部が分離すること、あるいは物体に別の物体が付着することであり、やはり物体の運動として説明されるだろう。実際ホッブズは「すべての変化は運動である」(DCo, 9.9, title) として、「変化は、感覚される物体の諸部分か、感覚する者自身の諸部分か、もしくは両方かのいずれかの運動に存する」(DCo, 9.9) と述べている。

これはアリストテレス主義の変化の概念が運動に還元されることを意味する。スコラ学者は、実体、量、質、場所のカテゴリーの区別に応じて「変化 *mutatio*」を四種に分け、実体の変化を「生成 *generatio*」「破壊 *corruptio*」、量の変化を「増加 *augmentatio*」「減少 *diminutio*」、質の変化を「異化 *alteratio*」、場所の変化を「移動 *latio*」ないし「場所運動 *motus localis*」と呼んだ。そして実体の変化だけは除いて、残り三つの変化を広義には「運動」であるとしたりした。その意味で「すべての運動は変化である」といわれた。^[18] これに対してホッブズは「すべての変化は運動である」として、実体の変化も含めた変化全般を、狭義の運動(場所運動)にほかならないとするのである。

しかし、さきに見たように、こうした還元の成否は自然学の成否に委ねられている。この点は、ホッブズの形而上学の性格を考える上で重要であり、本稿の最後であらためて取り上げる。

4. 因果論

(1) 原因と結果

ホッブズは、能動者と受動者という枠組みを用いて因果論を展開する。それはアリストテレスが『自然学』第1巻第8章で導入している枠組みであり、スコラの因果論においても標準的なものであった。しかし、アリストテレス主義の形而上学の基本概念を物体と偶有性に還元したホッブズは、原因と結果も物体のもつ偶有性として説明する。

第9章の冒頭の「能動 *agere*」と「受動 *pati*」の定義から見ていこう。

「物体は、他の物体のうちに何かある偶有性を生成させたり [それがもつある偶有性を] 破壊したりするとき、その物体に「能動する」といわれる。また他の物体によって、それ自身のうちに何かある偶有性が生成されたり [それがもつある偶有性が] 破壊されたりするとき、その物体から「受動する」といわれる。」(DCo, 9.1)

したがって、他の物体に能動する物体は「能動者 *agens*」といわれ、他の物体から受動する物体は「受動者 *patiens*」といわれる。そして「受動者のうちに生成される偶有性」が「結果 *effectus*」(DCo, 9.1) である。たとえば、火が手を暖めるとき、能動者は火であり、受動者は手であって、手に生成した熱が結果である。^[19]

ところで、火が手に熱を生成させるのは、火が物体だからではなく、熱をもっているからである。これは原因もまた偶有性であることを意味する。そこでホッブズは、原因を物体がもつ偶有性として、た

だし能動者と受動者の双方がもつ偶有性として定義する。それは「限定なしの原因 *causa simpliciter*」あるいは「全体的原因 *causa integra*」と呼ばれるものである。

「限定なしの「原因」、あるいは「全体的原因」とは、諸能動者、つまりあるだけの数の能動者すべてがもつ偶有性も、受動者がもつ偶有性も含めた、それらすべての偶有性の、ただし、それらすべてがそろったと仮定すれば、それとともに結果が産出されないとは考えられないし、それらの一つでも欠けたと仮定すれば、結果が産出されるとは考えられないような、そういう偶有性すべての集合である。」(DCo, 9.3)

これに対して、原因を、能動者のうちにある偶有性に限定して捉えたものが「作用因 *causa efficiens*」であり、受動者のうちにある偶有性に限定して捉えたものが「質料因 *causa materialis*」である。作用因と質料因は「部分的原因 *causae partiales*」ともいわれ、作用因と質料因を合わせたものが全体的原因である。

全体的原因は「それらすべてがそろったと仮定すれば、それとともに結果が産出されないとは考えられない」ような偶有性の集合であるのだから、定義により、結果を産出するのに十分であるし、また「それらの一つでも欠けたと仮定すれば、結果が産出されるとは考えられない」ような偶有性の集合であるのだから、定義により、結果を産出するのに必要である。ここに見られるのは、因果関係を論理的な必要十分条件に引きつけて理解しようとする傾向である。実際ホップズは、上で引いた定義の「産出 *productio*」を「帰結 *sequor*」で置き換えて、原因（十分条件に相当するそれ）をつぎのように再定義している。

「原因とは（定義により）つぎのような偶有性の、すなわち、それらがそろったと仮定すれば、結果が帰結しないとは想念することができないような偶有性すべての集合である。」(DCo, 9.7)

因果関係と論理的な必要十分条件とが重ね合わされると、原因と条件の区別が失われることになる。この点について、ひとこと述べておこう。スコラ学者、たとえばスアレスは「作用因」は「能動を介して、そこから結果が流れ出すところの、あるいは結果がそれに依存するところの原理」(DM, 17.1.6)であるとして、「能動」を介した依存関係の有無という観点から、原因（作用因）と条件を区別している。たとえば「能動者が受動者に近接していること」や「障害が取り除かれていること」などは、結果が生じるための「不可欠条件 *conditio sine qua non*」(DM, 17.2.5)ではあっても原因ではないというのである。ホップズもこれに似たもの、すなわち「不可欠原因 *causa sine qua non*」について語っている。しかし、それは「能動者がもつ偶有性であれ、受動者がもつ偶有性であれ「それなしには」結果が「産出され得ない」ような偶有性」(DCo, 9.3)、つまり原因を、結果の産出に必要な偶有性に限定して捉えたものであって、あくまでも原因の一種である。しかも、それを原因と呼ぶか条件と呼ぶかという名称の違いは別にしても、ホップズのいう「不可欠原因」とスアレスのいう「不可欠条件」とは内包的にも外延的にも異なっている。

以上のまとめとして、これまでに出てきた因果論の諸概念を、記号を用いて表してみよう。なおホップズは能動者が複数ある場合も想定しているが、以下の定式化では能動者は一つとした。

能動者である物体を A、受動者である物体を B、A が能動して B のうちに生成させた偶有性を e で表す。そして、e が産出されるのに必要十分な偶有性のうち A のうちにあるものを a_1, a_2, \dots, a_m , B のうちにあるものを b_1, b_2, \dots, b_n で表す。

$$A (a_1, a_2, \dots, a_m) \Rightarrow B (b_1, b_2, \dots, b_n | e)$$

このとき、 e が結果であり、 $\{a_1, a_2, \dots, a_m\}$ が作用因、 $\{b_1, b_2, \dots, b_n\}$ が質料因である、そして両者を合わせた $\{a_1, a_2, \dots, a_m, b_1, b_2, \dots, b_n\}$ が全体的原因である。

(2) 可能性と現実性

第9章の「原因」と「結果」に引き続き、第10章では「可能性 *potentia*」と「現実性 *actus*」の概念が取り上げられる。ホッブズによれば、原因と可能性は同じものであり、結果と現実性は同じものである。ただ同じものが、考察の仕方の違いに応じて異なる名前と呼ばれるのだという。原因と可能性の同一視から見ていこう。

「ある受動者のうちに何かある結果を産出するために、能動者の側に必然的に要求されるすべての偶有性が、ある能動者に内在しているとき、その能動者は、それが受動者に宛がわれさえすれば、当該の結果を産出し「得る *posse*」といわれる。」

「ある能動者によって受動者のうちに何かある結果が産出されるために、受動者の側に要求されるすべての偶有性が、ある受動者に内在しているときにはいつでも、それが適切な能動者に宛がわれさえすれば、その受動者のうちに当該の結果が生み出され「得る *posse*」といわれる。」(DCo, 10.1)

前者の引用中の「すべての偶有性」は、作用因を構成する「すべての偶有性」と同じものである。それゆえ作用因と能動者のもつ可能性（「能動的力能 *potentia activa*」ともいわれる）とは同じものである。また後者の引用中の「すべての偶有性」は、質料因を構成する「すべての偶有性」と同じものである。それゆえ質料因と受動者のもつ可能性（「受動的力能 *potentia passiva*」ともいわれる）とは同じものである。さらに「能動者と受動者の両方の可能性をとりまとめたもの」を「全体的可能性」(DCo, 10.1) と呼ぶことにすれば、それは全体的原因と同じものである。ただ、いずれの場合も、同じものが考察の仕方の違いに応じて異なる名前で、すなわち、すでに産出された結果（過去）との関係では「原因」と呼ばれ、これから産出される結果（未来）との関係では「可能性」と呼ばれる。

そして産出された結果すなわち偶有性は、原因との関係では「結果」と呼ばれ、可能性との関係では「現実性」と呼ばれる。

こうして可能性と現実性は、原因と結果の別名にほかならないとされる。したがって、原因と結果が物体のもつ偶有性なのであれば、可能性と現実性もそうだとことになる。さらに、さまざまな偶有性は、実在のレベルでは延長と運動に還元されるのであれば、原因と結果は、したがって可能性と現実性もまた、延長を本質とする物体の運動にほかならない、ということになる。実際ホッブズは、能動的力能（つまり作用因）にかぎってはあがあるが、それは「運動に存する」(DCo, 10.6) と述べている。われわれは、ホッブズの因果論に、因果関係を論理的な条件関係に引きつけて理解しようとする傾向のあることを指摘した。しかし、それは彼の因果論の一面であって、ホッブズにとって因果関係は、実在のレベルに属する事柄として、物体とその運動という観点から説明されるべき事柄でもあるのである。

ところで、可能性と現実性は、アリストテレス主義が変化を捉える枠組みを構成する概念であった。しかし、ホッブズが行っているのは、それらの概念を物体と偶有性を基本概念とする自らの形而上学の内部に取り込むことであって、可能性と現実性を論じるときの彼の主眼は、アリストテレス主義の枠組みを放棄して、変化をもっぱら物体がもつ偶有性の入れ替わり（物体の運動状態の変化）として捉えることに置かれていたと見るべきだろう。ちなみに、*potentia* は力能（可能性としての力）をも意味する語であり、ホッブズも *potentia activa*（さきに「能動的力能」と訳したもの）と *potentia passiva*（「受動的力能」と訳したもの）に言及している。しかし、上で示した見方が正しいとすれば、ホッブズは、

可能性としての力が現実に発揮される、という仕方では変化を捉えていなかったし、原因が結果を引き起こす力を発揮する、という仕方では因果関係を捉えていなかったといえるだろう。

(3) ホッブズの原因とアリストテレスの四原因

ホッブズは、アリストテレス主義の用語である作用因と質料因を引き継いで因果論を展開している。そこで、ホッブズの原因とアリストテレスの四原因との関係について考えてみよう。四原因の簡単な復習から始めることにする。

アリストテレスは、生成・破壊や変化という事態について、それがなぜそうあるのかを、つまりその原因（アイティアー）を明らかにして説明することが自然学の課題であるとした上で、「なぜ」の問いに答える四つの観点、つまり四つの原因を区別して取り出した（『自然学』第2巻第3章）。

- ①生成・破壊や変化によって生じた当のものが何からできているか、つまりその質料。
- ②当のものが何であるか、つまりその形相。
- ③生成・破壊や変化がそこから生じた始まり。
- ④生成・破壊や変化がそのために生じた目的。

これらは、中世ラテン語世界では、それぞれ「質料因 *causa materialis*」「形相因 *causa formalis*」「作用因 *causa efficiens*」「目的因 *causa finalis*」と呼ばれることになるものである。^[20]

さて、能動者 $A(a_1, a_2, \dots, a_m)$ が受動者 $B(b_1, b_2, \dots, b_n)$ に能動して B のうちに結果 e を産出する場合を考える。このとき B が e を欠いている状態、すなわち $B(b_1, b_2, \dots, b_n |)$ から、 B が e をもつ状態、すなわち $B(b_1, b_2, \dots, b_n | e)$ への変化が生じている。これは、可能態から現実態への移行というアリストテレス主義の枠組みにそくしていえば、 e が可能性の状態にある B から、 e が現実性に達した状態にある B への変化である。ところでホッブズの枠組みにおいては、 e は偶有性であるが、それは、 e ではなかった B を e にしているものという意味で、 e となった B の本質であり形相であるということが出来る。それに対して $\{b_1, b_2, \dots, b_n\}$ によって特徴づけられる B は、 e となった B の質料に当たるものである。また $\{a_1, a_2, \dots, a_m\}$ によって特徴づけられる A は、 B に生じた変化の始まりである。

このように見れば、 $\{a_1, a_2, \dots, a_m\}$ を作用因、 $\{b_1, b_2, \dots, b_n\}$ を質料因とするホッブズの因果論と、アリストテレス主義のそれとのあいだには一定の対応関係をつけることができる。^[21] しかし、すでに繰り返し指摘したように、ホッブズとアリストテレス主義とでは、変化を捉える枠組みが異なるのであるから、ホッブズの因果論は、こうした対応関係にもかかわらず、アリストテレス主義のそれとは基本的に異なるものだと見るべきであろう。

ところで、ホッブズは「形而上学者たちは、作用因と質料因のほかに二つの原因、すなわち「本質」（これをある人々は「形相因」と呼ぶ）と「目的」あるいは「目的因」を挙げる」が、「両者はともに作用因である」（DCo, 10.7）と述べて、形相因と目的因については、それらは作用因にほかならないとする。つまり形相因と目的因は、それらを作用因に還元することによって消去している。しかし、そうする理由については十分な議論を展開しているとはいえない。そこで、それを紹介して検討することは控える。ただ形相因と目的因を消去する別の仕方があった、ということは指摘しておこう。さきに見たように、 e は、 e となった事物の本質であり形相であるから、アリストテレス主義の枠組みにそくしていえば形相因である。また e は、生成・破壊や変化がそのために生じた目的、すなわち目的因であるとも見ることも出来る。しかし、ホッブズの枠組みにそくしていえば、 e は結果である。とすればホッブズは、形相因と目的因は、どちらも原因ではなく結果であるとすることによって、それらを消去することができたと思われるのである。

5. 自然学

ホッブズは、『物体論』第4部「自然学あるいは自然の現象について」の冒頭で、自然学をその一分野とする哲学をつぎのように定義している。

「われわれは（第1章において）哲学をつぎのように定義した。すなわち、それは「諸結果についての、それらの生成についてわれわれがもつ知識から出発する正しい推論によって獲得される知識であり、また何らかの可能的な諸生成についての、[生成した] 諸結果ないし諸現象についてわれわれがもつ知識から出発する正しい推論によって獲得される知識である。」（DCo, 25.1）^[22]

哲学とは、二方向の推論によって獲得される知識であるという。

推論①：原因（生成）から結果（現象）への推論。^[23]

推論②：結果（現象）から可能的原因（生成）への推論。

推論②の原因には「可能的」という限定が付されており、推論①と推論②のあいだに非対称性があることに注意しよう。これは、自然学という学問の性格にかかわる事柄として重要である。

ホッブズは、推論①と推論②の区別とそれらの非対称性を『物体論』全体の構成と関係づけてつぎのように説明する。彼が同書の第1部から第3部までにおいて行ったのは、定義から出発して定理を証明することであり、これは推論①を用いた探究である。この場合、推論の原理（始まり）は「定義」であり、それは「事物の呼称についての合意によって、われわれ自身が真にするものである」（DCo, 25.1）。それに対して、第4部において彼がこれから行おうとするのは「自然の諸現象ないし諸結果から出発して、それらが（[実際に] 生成した仕方とはいわないが）生成した可能性のある何らかの仕方を究明する」（Ibid.）ことである。これは推論②を用いた探究である。この場合、推論の原理（始まり）は「定義とは違って、われわれが制作するものでも普遍的に述べるものでもなく、自然の創始者によって事物それ自体のうちに置かれていることをわれわれが観察するものである」（Ibid.）。そして、この種の探究は「定理の必然性を生じるものではなく、ただ……何らかの生成の可能性を明らかにするだけ」（Ibid.）である。このように「ここで取り上げられる知識は、自然の現象に始まり、自然的諸原因についての何らかの学知に終わるものなので、私は、この第4部に「自然学あるいは自然の現象について」という題をつけた」（Ibid.）というのである。

ちなみに第4部の主題が自然学であるのに対して、第3部の主題は幾何学、第2部の主題は第一哲学、そして第1部の主題は論理学である。つまり第1部は、知識獲得のための方法論の検討に充てられ、その方法を適用した探究が開始されるのは第2部からである。したがってホッブズが第1-3部と第4部を対比して語ることは、実質的には、第2-3部（第一哲学、幾何学）と第4部（自然学）との対比にかかわる事柄と考えてよいだろう。

同じ対比に関する発言は、第4部の最後にもある。

「以上、物体一般の本性について述べてきたが、それが哲学原論の第1部門である。その第1部、第2部、第3部では推論の原理はわれわれの知性に、換言すれば、言葉の正当な用法にあるが、それはわれわれ自身が制作するものである。したがって、もし私が間違いを犯していなければ、そこでは、すべての定理の論証が正当な仕方で行われた。第4部は仮説に依存している。それらの真理性は不明のままである以上、われわれが説明した事物の原因が真の原因であると論証することは不可能である。しかしながら、私が採用した仮説はどれも可能的でしかも把握が容易なものばかりであるし、私は仮定からの推

論を正当な仕方で行ったので、私はそれが原因であり得るということは論証した。そして、これが自然科学的考察の目的なのである。」(DCo, 30.15)^[24]

ホッブズは、推論①と推論②の区別とそれらの非対称性という観点から、論証を二つのタイプに区別し、彼が『物体論』で扱った知識の諸分野を二つの領域に、すなわち第2部および第3部の主題である第一哲学および幾何学と、第4部の主題である自然学とに区分している。すでに確認した点も踏まえてあらためて整理すれば、第一哲学と幾何学の領域においては、われわれは、われわれ自身が制作した定義を原理として、推論①を用いた論証(『人間論』では「ア・プリアリな論証」と呼ばれる)を展開し、必然的定理の形で表現される知識を手にする。それに対して自然科学の領域においては、われわれは、われわれ人間ではなく「自然の創始者」すなわち神が制作した自然の現象(結果)を原理として、推論②を用いた論証(『人間論』では「ア・ポステリオリな論証」と呼ばれる)を展開し、所与の現象の「可能的」な原因、「可能的」な生成の仕方を明らかにするが、それは、その現象の実際の原因や生成の仕方、真の原因や生成の仕方ではかならずしもない。自然科学の知識は、第一哲学や幾何学の知識とは違って、仮説的性格を免れないのというのである。ちなみに「仮説 hypothesis」とは、ホッブズ自身の説明によれば「現象している結果の真の原因の代わりに置かれるもの」(DCo, 26.4)である。^[25]

ところで、自然科学が依拠する推論は、第30章からの引用では「假定 assumptis からの推論」といわれている。これは、その推論が、仮説として採用された可能的原因からその結果である現象への推論であり、推論①と同じ方向の推論であることを意味する。これは、第25章で述べられていたこと、すなわち自然科学の依拠する推論は推論①とは逆方向の推論であるということと矛盾するように見える。しかし、結果から可能的原因(生成)へと進む推論の正しさは、可能的原因(として假定されたもの)から結果へと進む推論の成否、すなわち、その原因によって所与の現象(結果)を説明できるか否かに依存するのだから、自然科学においても推論①と同じ方向の推論が使われるとすることにとくに問題はない。

6. 形而上学と自然科学

第1節から第4節で行った形而上学に関する考察の要点は、つぎのように整理することができる。

ホッブズは、アリストテレス主義の形而上学の基本概念を物体と偶有性(とりわけ延長と運動)の概念に還元する。したがって彼は、原因と結果も、物体のもつ偶有性として説明する。還元のポイントは、以下の三つである。

- ①物体を唯一の実体として、実体を物体に還元する(唯物論)。
- ②本質と偶有性の区別は命名に相対的であるとして、本質を偶有性に還元する(唯名論)。
- ③さまざまな偶有性を、実在のレベルでは、物体一般を特徴づける偶有性である延長と、物体の変化を説明する運動に還元する(機械論)。

一方、第5節で行った自然科学に関する考察によれば、ホッブズは、自然科学を、自然の現象を、仮説として立てられた可能的原因の結果として説明する学問と規定している。形而上学に関する考察を踏まえて言い換えれば、現象のレベルで捉えられた、物体とそのさまざまな偶有性によって記述される自然の現象を、実在のレベルにかかわる仮説として立てられた、物体とその運動によって記述される可能的原因の結果として説明するのが自然科学だということになる。このように、ホッブズの形而上学は彼の自然科学にその疑念枠組みを提供していると見ることができる。

さて、自然科学の成否は、立てられた仮説の成否、すなわち自然の諸現象を物体とその運動の結果としてどこまで説明できるかにかかっている。これは、よりよい仮説が立てられる可能性に言及することに

よって、ホッブズ自身も認めていることである。発言に付された但し書きも含めて引用する。

「そこでもし、ほかのだれかが別の仮説を採用することによって、これと同じことをあるいはそれ以上のことを論証したとすれば、私に感謝すべきである、と私が〔世の人々に対して〕要求する以上の感謝を、私はその人に対して捧げねばならないだろう。ただしこれは、その人の用いる仮説が想像可能なものであるとした場合の話である。というのも、もしある人が、何かそれが自身によって動かされたり産出されたりするとか、あるいは形象（スペキエス）、可能性（力能）、実体的形相、非物体的実体、本能、反対状況、反感、共感、隠れた性質や、スコラ学者が使うその他の空虚な語〔でしかないもの〕によって動かされたり産出されたりするかということとすれば、それは、まったく無駄な物言いだからである。」(DCo, 30.15)^[26]

それでは、自然学にその概念枠組みを提供する形而上学それ自体の成否はどのようなのだろうか。ホッブズは、スコラの形而上学の諸概念を「まったく無駄な物言い」として切り捨てているが、なぜそういえるのか。これは、ホッブズが進める三つの還元の成否にかかっている事柄である、ととりあえずはいうことができるだろう。「宇宙の除去」の仮定からはじまるホッブズの議論を簡単に振り返ってみれば、物体は、さまざまな偶有性の、したがってさまざまな仕方での命名の主体（命名される何ものか）としてその存在が要請される。その物体は、空間概念と相関的に定義されるものである以上、延長を偶有性とするが、延長をもたない物体は考えられないという意味で、延長は物体のもつ偶有性のなかでも特別である。そして延長にそくして物体の変化を考えれば、それは空間的な場所移動としての運動しか考えられない。このように見れば、ホッブズが進める還元にはたしかに一定の根拠がある。彼の形而上学が自然学にその概念枠組みを提供しているといえるのもそのためである。

しかし、還元の手続きを方向づけている唯物論、唯名論、機械論、すなわち「〔宇宙〕はすべての物体の総体であるのだから、その実在的部分であって同時に「物体」でないようなものはないし、適切に「物体」といえるものであって、同時に（すべての「物体」のあの総体、つまり）「宇宙」の部分でないようなものもない」(Lev, 34.2.207)（唯物論）、「この世界に、名辞のほかに普遍的なものはない」(Lev, 4.6.13)（唯名論）、「変化は、変化する物体の諸部分の運動にほかならない」(DCo, 9.9)（機械論）はどうかといえば、これらは、いずれもホッブズの確信の表現であって、形而上学の内部では論証なしに前提とされているといわざるをえない。

これはしかし、ホッブズの形而上学が結局はたんなる確信の表明に帰着するものであることを意味するわけではない。自然学が仮説的な原因探究の学問であったように、形而上学もまた唯物論、唯名論、機械論をいわば仮説として採用した上で自然学にその概念枠組みを提供していると見ることができるからである。形而上学のこのような捉え方は、還元③の成否を、自然の現象を物体とその運動によって説明する自然学の成否に委ねるという仕方、機械論についてはホッブズ自身が明言していることである（本稿第3節の(2)を参照）。唯物論と唯名論、つまり還元①と②については、これに対応する明示的発言は見当たらない。^[27]しかし、物体とその偶有性という、唯物論と唯名論が提供する枠組みは機械論のものでもあるのだから、機械論の成否を自然学の成否に委ねることは、同時に唯物論と唯名論の成否もまた自然学の成否に委ねることにほかならない。

これが意味するのは、形而上学はそれだけで自己完結する学問ではないということである。ホッブズの形而上学は、自然学のまえに置かれて、自然学にその概念枠組みを提供するという役割を果たす一方で、そうした枠組みでもって展開される自然学の成果をまってはじめて、つまり自然学のあとに完成されるという性格の学問なのである。とすれば、ホッブズの自然学の成否、より一般的には、唯物論、唯

名論、機械論を基調とするホッブズの形而上学と整合的であるような自然学の成否を検討すること、これがつぎの課題として浮かび上がってくる。しかし、これは別途詳しい考察を要する事柄であるから、その点については機会をあらためて論じることとしたい。

【注】

- [1] ホッブズの認識論については、秋元 2014 で簡単に論じた。
- [2] レイエンホルストが「自然哲学 natural philosophy」と呼ぶものを、ホッブズは大抵の場合「自然学 physics」と呼んでいる。ただし「自然学」という表現は、本文中の引用にあるように、レイエンホルストもときに使用するし、逆にホッブズも「自然哲学」という表現を使用することがある。
- [3] 「静止しているものは、外部から動かされないかぎり、つねに静止しているであろうし、運動しているものは、外部から妨げられないかぎり、つねに運動しているであろう」(DCo, 8.19, title)。
- [4] スコラの一般自然学について、またそれとホッブズの第一哲学との関係については、Leijenhorst 2002, 4-7, 34-37 を参考にした。
- [5] レイエンホルストによれば、中世後期のアリストテレス主義者たちのあいだでは、「形而上学 metaphysica」という書名はアリストテレス自身がつけたものであり、「超自然学 transphysica/superphysica」を意味するという理解が一般的であった。しかし、16世紀になると、その書名はアリストテレス本人に由来するものでないことを、反アリストテレス主義の人文主義哲学者パトリッツィ (Francesco Patrizi, 1529-97) などが指摘し始めたのだという。Leijenhorst 2002, 20-22。
- ホッブズは、『トマス・ホワイト「世界論」に対する批判』(c. 1643)でも「形而上学」という書名の由来に触れており、「アリストテレスの後継者たちは〔第一哲学を論じた〕書物が題名を欠いていることを見出して、それを、彼の著作集のなかで、自然学を論じた書物に後続する順序に配置した」(CDM, 170)とする見方を「もっとも学識ある人々」の見解として紹介している。
- [6] 「場所と時間について」という表題にもかかわらず、第7章で定義されるのは空間と時間であり、場所は第8章で定義される。
- [7] 宇宙の除去ないし無化を仮定する思考実験は、後期のアリストテレス主義者たちのあいだでは一般的であったし、反アリストテレス主義の人文主義哲学者パトリッツィも用いたものであるという。Leijenhorst 2002, 109。パトリッツィについては、注[5]を参照。
- [8] 「現実存在」の意味については、本稿第3節の(1)を参照。
- [9] 空間と同様、場所も、それは表象であるから想像上のものである。
- [10] ホッブズの形而上学は、世界を構成する物体の除去を仮定することから始まるのであるから、物体の存在を前提とするものであって、それが実在のレベルをもつことは不思議なことではない。
- [11] 近世スコラのアリストテレス主義者たちの空間概念、およびそれとホッブズの空間概念との関係については、Reijenhorst 2002, 111-123 を参照。レイエンホルストは「想像空間」の概念は近世スコラのアリストテレス主義者たちが使ったものであること、またホッブズの空間概念がスアレス (Francisco Suárez, 1548-1617) に多くを負っていることなどを指摘している。
- [12] 岸畑は、想像空間(表象)と実在空間(延長)の違いを説明して、前者がある視点から見たパノラマ的秩序であり、物体の見かけの大きさ(遠くのは小さく見える)を示すのに対して、後者は三次元の座標空間であり、物体それ自体の大きさを示すとしている。岸畑 1974, 54-56。
- [13] ここには「実体」の概念への言及はない。しかし『リヴァイアサン』を見ると、ホッブズは「物体」を『物体論』とほぼ同じ仕方で「ある一定の空所ないし想像された場所を満たすもの、あるいは占めるもの、そして想像には依存せず、われわれが「宇宙」と呼ぶものの実在的部分をなすもの」と定義した上で、「「実体」と「物体」は同じ事物を表す」(Lev, 34.2.207)と述べて両者を同一視している。
- [14] アリストテレス主義の形而上学に関する以下の叙述は、Freddoso 2002, xxix-xxxix を参考にした。偶有的変化と実体的変化の区別については、Fink 2015, 17 も参照。

- [15] 「質料」「形相」「欠如」を变化の三要素とする見方は、アリストテレス自身まで遡る。『自然学』第1巻第7章を参照。
- [16] 偶有性の主体が変化するとは、主体それ自体が別のものになることではなく、主体のもつ偶有性が入れ替わることである。
- [17] シューマンは、『カテゴリー論』第2章(1a24以下)を参照箇所として挙げた上で、発言の後半部分はむしろポルピュリオス『エイサゴゲー』第5巻(4a25以下)に由来すると指摘している。Hobbes 1997, 111, n. 30, Hobbes 1999, 84, n. 1.
- [18] アリストテレス主義による変化の捉え方については、Leijenhorst 2002, 179を参照。
- [19] 手を暖める火、これはホッブズ自身が挙げる例であり、彼は、火を物体として扱っている。これは、地水火風の四元素のそれぞれを実体と見なしたアリストテレス主義に倣った語り方である。
- [20] アリストテレスの『自然学』がラテン語に翻訳されたのは1150年前後のことで、これ以降、四原因を含むアリストテレス自然学に関する研究も本格化した。しかし、同書の翻訳以前にすでにアベラルドゥス(Petrus Abaelardus, 1079-1142)は、四原因をそれらの名で呼ぶとともに、その数え方はボエティウス(Boethius, 480頃-524(26))まで遡ると指摘している。Fink 2015, 13を参照。
- [21] ホッブズは、能動者Aではなく、それがもつ偶有性を作用因としているが、これもスコラの因果論における principle-*quod* と principle-*quo* の区別に対応するものと見ることができる。principle-*quod* とは「ある能動がそこから生じるところの事物ないし「仮定物 suppositum」」(Fink 2015, 103)であり、principle-*quo* とは「ある能動者がそれによってその能動を行うところの原理」(Ibid., 104)である。
- [22] これと同様の定義は『物体論』第1章と第6章にもある。
- [23] 引用した定義に「原因」への言及はないが、推論①は、第1章の定義では「諸原因ないし諸生成」からの推論であるとされている。また以下で見ると、推論②が「原因」への推論であることは、第25章にも言及がある。
- [24] これに続くホッブズの発言は、次節で引用する。
- [25] 『人間論』の対応箇所としては、DH, 10.4-5を参照。そこでは幾何学、自然学、政治学の三分野が二領域に、すなわち推論①によって成立する幾何学・政治学と、推論②によって成立する自然学とに区分されている。
- [26] 「反対状況 antiperistasis」については、Hobbes 1997, 324, n. 164にシューマンによる解説がある。
「生理学において(たとえば、眠りやいくつかの病気の)また自然学において(たとえば、流星や稲光と雷鳴の)説明モデルとして使用されたアリストテレス主義の術語。それによれば、ある性質(たとえば温)は、それと対立する性質(冷)によって取り囲まれると、自身の内に向かって収縮し、ついにはそれだけいっそう大きな圧力で外に向かって爆発する。」
- [27] ホッブズは、物体を「想像空間の下に敷かれ、置かれているように見え、そこに何かがあるということが、感覚ではなく理性[推論]によってのみ理解される」という理由で「仮定物」とも呼んでいた(本稿の第3節参照)。これを、物体の存在それ自体が仮説であることの表明として読むことはできるかも知れない。

【一次文献】

- Hobbes, Thomas [1966 a] *Thomae Hobbes Malmesburiensis opera philosophica quae latine scripsit omnia*, edited by William Molesworth, 5 vols., second reprint. Darmstadt: Scientia Verlag Aalen.
- [1966 b] *Elementorum Philosophiae Sectio Secunda, De Homine*, in Hobbes 1966 a, vol. 2. [DH]
- [1969] *The Elements of Law, Natural and Politic*, edited with a Preface and Critical Notes by Ferdinand Tönnies, 2nd edition. London: Frank Cass and Company Limited. [EI]
- [1973] *Critique du De Mundo de Thomas White*, édition critique d'un texte inédit par Jean Jacquot et Harold Whitmore Jones. Paris: Vrain. [CDM]
- [1976] *Thomas White's De Mundo Examined*, translated by Harold Whitmore Jones. London: Bradford University Press.
- [1997] *Elemente der Philosophie. Erste Abteilung: Der Körper*, Übersetzt, mit einer Einleitung und mit textkritischen

- Annotationen versehen und herausgegeben von Karl Schuhmann. Hamburg: Felix Meiner Verlag.
- [1999] *De Corpore, Elementorum Philosophiae Sectio Prima*, Edition critique, notes, appendices et index par Karl Schuhmann. Paris: Vrain. [DCo]
- [2012] *Leviathan*, edited by Noel Malcolm. Oxford: Clarendon Press. [Lev]
- Suárez, Francisco [1994] *On Efficient Causality, Metaphysical Disputations 17, 18 and 19*, Translated by Alfred J. Freddoso. New Haven: Yale University Press. [DM]
- [2002] *On Creation, Conservation, and Concurrence, Metaphysical Disputations 20, 21 and 22*, Translation, Notes and Introduction by Alfred J. Freddoso. South Bend: St. Augustine's Press. [DM]
- アリストテレス[1968]『自然学』出隆・岩崎充胤訳,『アリストテレス全集』第3巻,岩波書店。

【二次文献】

- Fink, Jakob Leth (ed.) [2015] *Suárez on Aristotelian Causality*, Leiden: Brill.
- Freddoso, Alfred J. [2002] “Suarez on Metaphysical Inquiry, Efficient Causality, and Divine Action,” in Suárez 2002.
- Leijenhorst, Cees [2002] *The Mechanisation of Aristotelianism: The Late Aristotelian Setting of Thomas Hobbes' Natural Philosophy*. Leiden: Brill.
- 秋元ひろと [2014] 「scientia と potentia — ベーコンとホッブズの知識論 —」,『論集』第16号,三重大学人文学部哲学・思想学系,教育学部哲学・倫理学教室。
- 岸畑豊 [1974] 『ホッブズ哲学の諸問題』創文社。

本稿は、科学研究補助金（基盤研究(c)、課題番号 16K02117）の研究成果の一部である。